

「おやさまの灯り」を読んで

三枝マングタル春菜 (30歳 フランス)

2015年から2年間、フランス・パリにあるヨーロッパ出張所で女子青年として務めながら、パリ天理語学センターで日本語を教えていました。その後、日本へ戻って修養科を志願したときのクラス担任が、長年にわたって里親活動を続け、詩文集『家族を紡いで』（道友社刊）を出されている白熊繁一先生でした。

修養科を^{おえ}え、出張所で再会した男性と結婚。現在は布教所長である義母が運営するフランスの日本語学校で教師をしています。

先生は、修了後もクラスの皆に「おやさまの灯り」の続編を送ってくれます。詩を受け取ったとき、不思議とおちばから届いたと思っていました。実際は、教会がある東京から送ってくださっていました。そのことを話すと、「教祖にお供えしてから送ったんだよ」と言われ、「だからおちばから届いたと思う

たんだ」と納得しました。いま、新型コロナウイルスの感染拡大という大きな節を見せられ、先が見えない不安や苦しみに心を倒しそうになるなか、先生から最新の「おやさまの灯り」が届きました(写真)。

フランスでも仕事はテレワークが中心となり、100%以上の外出は許可証が必要になるという状況です。

この詩を読んで、「いま私にできることをしよう」と考えました。そして、私の授業を受けている生徒たちを励ますためのイベントを企画しました。

先生の詩には「見せられる大きな事情を通して おやさまのお心にもっともっと近づけるよう 変えることをお誓いします」とあります。

いまこそ一人ひとりが世界中の人々の幸せを願い、互いにたすけ合うことが必要とされているのではと思います。

それを聞いた先生は、私たちがおちばから離れても教祖の温もりを感じられるようにと、「おやさまの灯り」という詩を作ってくれました。詩を読んだとき、教祖がお見守りくださるって

当たり前のことなど 何もないと思っていました

でも 今までの私の理解が浅かったことに 気づきました
人が集まることと 接することの自棄から 人のつながりと
何気ない会話の導きが 心に染みてきます
さまざまなものの不足から 手を合わせます

おやさま…
おやさまに出会えていて

良かった…

心から 癒しさがこみ上げてきます
私の心に灯る
おやさまの灯りのおかげです

今 世界に見せられる大きな事情を通して
おやさまのお心に
もっともっと近づけるよう
私の生き方を 変えることをお誓いします

おやさま
ありがとうごさいます



おやさま
毎日 お願いつとめをつとめながら
教祖のお声が聞こえます
「考え方や生き方を 変えるのですよ」と
私の心に響きます

みんなでおつとめをつとめることにも
においげけをするこも
ままならない日が続いています
現代を生きる私に
このような日が訪れようとは
夢にも思わないことでした

世界中に 新型コロナウイルス感染症が広が
大勢の人が罹れ 出画している日々の中
今 教祖のお心だけに しがみつ
ご縁を結んでいただく
そして 世界中で苦しみの中にいる人々の
無事を 親神様にお願ひしています

教祖の教えを戴きながら
詩のめぐりも 人との出会いも
すべてのものの恵みも 今というひと詩も
全部が 親神様のご守護をいただいてこそのこと

おやさまの灯り

vol.4



令和2.4.14
S. Shirakawa

おちばから遠く離れたこの場所、この大節から自身のお心を見つめ直し、日本語を教えるという役割を通じて、お道のにをいを広めたいと思います。